

# 真っ当な常識に基づいた 震災復興を



京都大学大学院 藤井 聡

東日本大震災から半年以上もの時間が経過しようとしている今日、大震災によって激甚なる被害を受けた街々の復興のあり方が様々に議論されている。そんな議論の中でもとりわけ影響力あるのが、菅前首相が示した「元に戻す復旧ではなく、創造的な復興案を」という合い言葉だ。そしてそのヴィジョンの中で喧しく論じられているのが、エコタウンやコンパクトシティであり、あるいは集約型の農業や近代的漁業である。

その背景には、様々な状況認識がある。まず、今回の津波被害は、多くの沿岸部の街々を根こそぎ洗い流した。だから「元に戻す復旧」を採用せずとも、全く別の街をつくりあげることが「可能」な状況にある。あるいは、場所によっては地形すら変わってしまったところもあり、かつ、自治体によっては凄まじい数に上る犠牲者が生じた事から「元にあった家屋や建築物」の全てが必要とされているわけではない、という実情もある。

こう考えれば、「元に戻す復旧ではなく、創造的な復興案を」という基本方針には妥当性があるかの様に思えたとしても不思議ではなからうと思う。

しかし、よくよく考えてみれば、その基本方針には、重大かつ致命的な欠点があることが明らかだ。その一方で、「元に戻す復旧をベースとして、可能な限りの「改善」を目指す」という凡庸とすら言う程に当たり前の基本方針には、圧倒的に優れた方針であることが見えてくる。

第一に、「元に戻す復旧」を放棄し「白地図に線を引くような計画」を考えた瞬間に、無限とも言いうる可能性が拡がる事となる。したがって、復興計画をまとめ上げるために長い時間が必要とされることとなる。しかも、リニューアルされたよそよそしい都市計画では、住民合意を得るまでにまた時間が必要となる。つまり、「白地図に線を引くような計画」には「迅速さ」が圧倒的に不足しているのである。ところが「元に戻す復旧」を基本とすれば、この「迅速さ」を得る事ができる。今回の大震災の復興において大方の想像を遙かに超える程に欠落していると言っても過言ではないこの「迅速さ」こそが、(誠に遺憾ではあるが本来ならば)被災地復興にとって何にもまして必要とされるものなのだ。

第二に、目新しい都市計画には、(かの多摩ニュータウン

での“孤独死問題”に代表されるように)「予期せぬ副作用」に苦しめられるリスクが常にある。一方で、「元に戻す復旧」でつくられる街には、そんな副作用は原理的に存在しない。むしろ、防災に対する脆弱さを含めた、それぞれの街々の「弱点」が、「過去の経験」によって明らかにされている。だから、「元に戻す復旧」をベースとすることで「予期せぬ副作用」を被るリスクを回避した上で、「可能な限りの改善」を果たすことで、既に明らかにされている「弱点」を補う事が可能となるのである。

つまり、菅元首相が否定した「元に戻す復旧」を採用する方が、迅速で、しかも、予期せぬリスクを回避した復興が可能となるのだ。しかも、今回の津波被災を含めた、それぞれの地の「経験」を踏まえた「改善」の方向を、具体的に、かつ、それぞれの地の固有性を反映する形で検討することも可能となるのである。

しかもそもそも、「創造的な復興」を果たさんとする土地に、実際に住み、生業を営むのは、創造的で奇抜なアイデアを提出する様な専門家達などではないという点を忘れてはならないだろう。そこに住むのは、家族を失い、見慣れた風景を失い、それでもなおその土地に住まんとする人々なのだ。筆者には、アイデア供出者の多くが、この当たり前の一事を失念してしまっているのではないかと思えてならない。言うまでもなく、復興アイデアを供出する人々は皆、全身全霊を込めて自らの身を被災の地に置いてもお、提案をすべきだところから思える提案以外を供出することなど、断じてあってはならないのだ。

いずれにせよ、今回の震災復興は、平成関東大震災にせよ西日本大震災にせよ、近い将来生ずるであろう巨大震災における復興の雛形となることは間違いない。だからこそ、大方の日本人が今回の震災を他人事としてやり過ごす様な態度を取る限り、その不道徳は必ずや我が身に降りかかることとなると理解せねばなるまい。

被災地復興のためにも、そして、未来の巨大震災の適正なる復興のためにも、常識的で真っ当な判断に基づいた方針でもってこれからの復興が成し遂げられんことを、一専門家として心から祈念したい。